優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

四島を忘れないために

向日市立寺戸中学校
二年　山下　陽菜乃

父の話を聞いているうちに、自然と涙が溢れてきた。今までになかった感情だった。春休みの社会科の宿題で北方領土問題を取り上げようと考えた私は、社会科の教師をしている父が、八年前に参加した根室市での北方領土研修会の体験を聞いた。

当時、小学生だった元島民の方の体験談は想像を絶するものだった。さらに父が懇談会で直接話をした別の元島民の方が、父に見せた故郷の写真とそれに込められた思いを聞いて、残された時間が少ないことを痛感させられた。

また父が見せてくれた現在の北方領土の写真には、多くのロシア人が生活しており、私よりも幼い子どもたちの故郷となっている現実が映し出されていた。この昔と今の話を聞いた後、「この問題をどうすれば解決できるか」という父の問いに、元島民の方々のことを考えるとどう答えていいかわからず涙があふれ出たのだ。

なぜ解決に時間がかかりすぎているのかと父に聞くと、父は複雑な北方領土問題の経緯を教えてくれた。

さらに近年、ロシア側の大規模開発が進み、問題解決が遠のいている。また軍民共用の新空港建設により、軍事拠点化も進みロシアにとっても四島が北太平洋の重要な拠点となりつつあることも新聞で知った。

では日本はこの問題についてどう対応すべきなのだろうか。ロシアが四島を返還するのが当然であると日本政府はロシア政府に訴え続けてほしい。しかしロシアにとっても重要な拠点となっている以上、早期の返還は容易なことではないだろう。

一昨年、日ロ首脳会談で四島での共同経済活動が提案された。確かに両国が制度や法律の違いを歩み寄って実現していくのは容易ではない。しかし、この活動が日本主導で進められ、本土との貿易が活発になり、日本企業の進出が増えれば、四島での日本の存在感が増し、島に住むロシア人の意識に変化が芽生えるのではないかと考える。

そうなればロシア側も元島民に対する人道的な配慮を行い、超高齢化が進む元島民の永住や北方領土への自由な往来を認めるのではないだろうか。本当に元島民の方に残された時間はわずかなのだ。

両国は言うまでもなく世界のリーダー国である。完全返還という解決の日まで「両国民永住認可と共同経済活動の地」と定め、両国民がともに暮らせる場とすることで領土問題解決の「モデルケース」をリーダー国として世界に示してほしい。

北方領土を「故郷」とする人々が両国に数多くおられる。過去にこだわるよりも、未来を考えて誰一人として悲しむことがないような斬新な解決方法を私たちは模索すべきだと思う。

この作文を書いている最中に行われた日ロ首脳会談では、日ソ共同宣言を基礎に平和条約交渉を加速させる事で合意したと発表した。「戦後七〇年以上残されてきた課題を時代に先送りしない」と安倍首相が述べたことに大きな期待を持ちたい。

私は千年の古都京都に住んでいる。正直国境という感覚がなくこの問題も調べ学習をしたり、父の話を聞くことがなければ問題意識を持つこともなかっただろう。

しかし、戦後七十三年経った今でもこの国の中に戦争が終わっていない人々がいる事を、私たちは決して忘れてはならないだろう。

先日シリアで拘束されていた日本人ジャーナリストが解放された。世間では「自己責任」の文字が躍り非難の声が高まった。中には「迷惑をかけてまで伝える必要があるのか。」という意見もあった。しかし苦しむ人々の現状を命をかけて伝える人を批判する前に、私たちの無知と無関心さに警鐘を鳴らすべきなのではないだろうか。これは北方領土問題についても同じ事が言えるのだ。

私は将来、故郷の京都で中学校の社会科の教師になりたい。四島返還の日まで、この問題は絶対に風化させてはならない。今回学んだ事や両国の島民の思い、歴史的な経緯、政治経済上の問題などをきちんと踏まえて、北方領土問題を次世代の子どもたちに伝えていける教師になりたい。

優秀賞（京都市教育長賞）

ロシア語を勉強する

京都市立桂川中学校
三年　藤井　美羽

「今、島にいるロシア人は悪くない。」これは、北方領土の不法占拠が始まって以来、ずっと返還を望んでこられた元島民が書かれた言葉です。「なぜそう思えるのか、もっと怒ったりしてもいいのではないか。」私はこの言葉を見たときこう思いました。実際に、私と同じ意見の人も少なくないと思っています。また、不思議なことに現在、日本とロシアの間には多くの交流が行われています。どうして、私たちの領土を奪ったロシアと交流を深めるのか。この疑問は、私が北方領土問題を調べることへの大きなきっかけとなったものです。

北海道本島の北東洋上に位置する歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島の四島のことを北方領土と呼びます。北方領土はいまだかつて一度も外国の領土となったことのない日本固有の領土です。それにもかかわらず、一九四五年に日本がポツダム宣言を受諾し降伏した後に、ソ連軍が侵攻してここを占領し、今もなお北方領土の不法占拠が続き、ロシア人の居住地となっています。元島民の方は故郷からの退去を強いられ、北海道本島などに住んでおられます。その人たちの平均年齢は八〇歳を過ぎるようになりましたが、故郷の島に自由に立入りができない状態は続いているのです。

しかし、日本では北方領土返還を目的とした運動が各地で行われ、様々な取組も行われています。その中には、日本国民と四島に住むロシア住民との交流も実施されているようです。これは、文化交流を中心にしながら、四島に住むロシア人に対して、日本や日本人への理解を深めることに役立っていると考えられます。

このような交流が進められている中、元島民の方々の思いとはどのようなものなのかを調べてみると、元島民の方でロシア語教室に通っている人の存在を知りました。なぜ、わざわざロシア語の勉強をするのかというと、早く北方領土が返ってくるようにとの願いから、「ここには日本人が住んでいた。」ということを直接伝えたいからだということです。この方は、「ロシア語で話すとロシア人の反応が全く変わるのだ。」と言われていました。一日も早く返還が近づくようにとの思いから、ロシア語を一生懸命勉強して、元島民としての思いをしっかりと伝えようとされているのです。

私はこのことを知り、今までの私のように北方領土問題について、深く理解していない者が、単に怒っているだけでは意味のないことだと感じました。そして、元島民の方がおかれている現状を理解し、その思いを共有して多くの人に伝えることが、日露間にある領土問題の平和的な解決の鍵となるのではないかと考えるようになりました。ただ、そのためには国民の一人ひとりが、自分と北方領土問題は無関係だというような意識を捨て、北方領土問題に対して強い関心をもち、しっかりと解決に向けて考え、行動することが大切です。

私自身もこの作文を書くことで、北方領土についての関心は高まっていきました。だから、これからも中学生に、北方領土についての作文を書く機会を与えることは、とても意義あることだと思うようになりました。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

視察から見出したこと

京丹波町立和知中学校
三年　堀　奏羽

北方領土に隣接する北海道の道東地域。一見普通の街並みに、「北方領土は日本固有の領土です」と書かれた看板が異様な雰囲気を漂わせていた。かなりの違和感と衝撃があったのを覚えている。道東に暮らす人々にとっては、当たり前の光景なのだろうか。私はその看板を見るたびに、まだ日本中に平和は訪れていないのだと気づかされるようで重苦しい気分になった。

今年の夏、北方領土現地視察団として隣接地域を視察し、このように現地に行かなければ気づかなかったことがたくさんあった。その上で、自分なりに北方領土問題にどう関わっていくのか、答えを見出せた気がしている。

現地でお話を聞いて、驚いたことがある。北方領土に住むロシア人は、日本人に好意的だということだ。日本製品の技術が高く評価されている。そして、北方領土付近で起こった災害の際に、日本が支援物資を送ったことが感謝されているからだという。隣接地域ではホームステイや対話集会などの交流が盛んに行われ、住民同士の仲は深まっている。とても意外だった。

不法占拠から七〇年以上が経った今でも問題解決にならない理由は、複雑な背景にあると思う。純粋に日本とロシアだけの問題でないことも視察を通して改めて分かった。ただ、一向に解決の兆しが感じられていないような気がしていた。しかし、今、住民同士は良好な関係を築けている。これは、七〇年間の人々の努力の結果だ。地道に、けれど着実に解決に向けて前進している。

一方で、私たちはこの問題にどのくらい真剣に向き合えているだろうか。どこか、他人事のように感じてしまっていないか。

「ロシアは、元島民や日本の一部だけが返還の要求をしていると思っている。」

元島民の方のお話の中でこうおっしゃった。このとき、私は視察の中でうっすらと感じていたことがはっきりした気がした。それは、国民の、北方領土問題に対する意識の差だ。道東を少し離れれば、近くに北方領土の看板なんてないし、返還要求の看板もない。北方領土問題はたちまち忘れ去られてしまう。しかし、これではいけないのだ。私たちの意識の低さが、問題解決をより遠いものにしてしまう。国民が正しい理解のもと、一致した世論を貫けば、解決へと大きく動き出せるはずだ。

岬から見た北方領土は目と鼻の先にあった。すぐそこにある故郷に帰れないという現実は、思っていたよりもずっと残酷に感じられた。なんとかしたいと思うだけで、自分にはなんの力もない。でも、更新されていく北方領土問題の「今」を追い続けようと思った。いつかあの看板が無くなる日が来ることを願う。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

忘れがたき故郷

京都市立北野中学校
二年　大林　華

船が不気味な音を立てながら海を走りだした。思い出のある小さな島々が少しずつ小さくなっていく。誰も悲愴な表情を浮かべ、我が故郷に別れを告げている。

これは、私が故郷と引き離される元島民たちの様子を想像してみたものである。当時、北方領土に住んでいた約一万七千人の日本人のうち、約半数は自ら脱出したが、それ以外の島民は一九四七年から一九四八年にかけて、北方領土から強制撤去させられた。そしてサハリンでの長い抑留を経て、ようやく日本に送還されたのだった。現在、元島民の人々は日本各地で生活を送っている。島を追われて七〇年余りの月日がたった今、どのようなことを思い、感じ、過ごしているのだろうか。

一九四八年一〇月、サハリンへの強制送還の命令が出された。身の回りの品だけを持ち、岬を二つ越えた集合場所まで、ソ連兵にマンドリン銃を突きつけられながら歩いた。やがて荷物と一緒にウィンチで吊り上げられ、船底に入れられた。紙に書いたものを持っていくことは一切許されず、見つかるとスパイ容疑で取り調べを受けるといわれていた。食べ物はコーリャンのお粥と鰊の塩づけだけであった。

これは元島民の方のお話である。私はこの話を聞き、私がはじめに思っていたこととの違いにとても驚いた。同じ人間としての扱い方ではないからだ。たとえ戦争に敗れたとはいえ、ひどすぎる。この経験をした元島民たちに、島はなぜ返ってこないのか。私はどうしてもわからない。政治の問題であるより先に、北方領土は元島民の故郷だからだ。元島民の方々は言う、

「自分が生きている間に、島を返して」

「北方領土が私たちの故郷であったことを忘れないで」

と。

まさにその通りだと思う。島を離れる時でさえ、きちんとお別れもさせてもらえなかった故郷を早く元島民の方々に返してほしい。

私たちが昔から親しんでいる童謡「故郷」にも、「雨に風につけても、思いいずる故郷」という歌詞がある。その歌詞からも懐かしい故郷に対する強い愛情がひしひしと感じることができる。このように故郷とは、その人にとってかけがえのないたった一つの場所なのだ。

だからといって、島が返ってくるわけではない。北方領土にはもうロシア人の新しい命が生まれ、その人々の故郷も北方領土なのだ。だからこそ、私たちは訴えていかねばならない。日本人とロシア人が共に自分の故郷として幸せを感じ、思い出を作れる場にしていこうと。

今、私たちにできること、それは北方領土について深く知ることではないだろうか。まずは、北方領土のことを日本に住むすべての人が理解したうえで、新たな道は開けると私は思う。私たちの世代こそ、北方領土などの大きな問題に無関心ではいけないのだ。これは日本に暮らす全ての人の問題でもあるのだから。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

私の一歩

南丹市立園部中学校
二年　西山　満琉

北方領土が返還されたら、元島民の方々はすぐにでも島へ戻られるだろう。

私はこの夏、北方領土に一番近い北海道の根室に青少年現地視察事業に行き、元島民の河田さんの話を聞くまで、そう思って疑わなかった。しかし、河田さんはこう話された。

「もし北方領土の返還が実現したとしても、もう住もうとは思わない。」というものだった。私は強い衝撃を受けた。どうしてだろうと思った。

北方領土がロシアに不法占拠されてから七〇年以上が過ぎた。この間、日本は高度経済成長を遂げ、世界有数の技術大国になった。最先端の技術、最先端の医療、そして福祉の分野でも世界の中で高水準の国になった。この国に生まれ育った私は、今この状態が普通だと思っていた。しかし人権学習で学んだ他の国々はそうではなかった。むしろ私のような生活をしている人の方が世界では少ないことがわかった。数年前、私の中学校の先輩方が北方領土を訪問された。その時の写真を見ると未舗装の道、処理されないままのゴミ、廃船が放置された港など、日本ではあり得ない様子があった。現在、ロシア政府は四島のインフラ整備を進めているそうだ。しかし、日本と比べるとまだまだ進んでいない現状がある。一方で元島民の河田さんはすでに八〇歳を超えておられる。高齢の身には北方領土での暮らしは不安が大きい。だからせっかく返還されても住めないのだろうと思った。

私はこの話を聞き、北方領土問題の解決への気持ちがさらに強くなった。このままだと不幸なまま、あきらめざるを得ない人を増やしていくばかりだ。そんな時こんな体験を思い出した。小学四年生の時、数人の友だちと約束をしていた時のことだ。ある友だちが「私も遊びたい。」と言いだしたのに、私たちはそれを断り、それからその子の事を避けるようになり、その子の心を深く傷つけてしまったのだ。もしあの時、仲間に入れてあげていればその子は悲しい思いをすることがなかったかもしれない。どうして私はあの時、その子の気持ちになって考えてあげることができなかったのか。その子の顔と河田さんのあきらめにも似た「もう住もうと思わない」という言葉が重なった。

私はこの体験を思い出して、もう誰かを悲しいまま、あきらめたままにさせるような自分でいたくないと思った。元島民の方々の切実な願いに気づき、思いにもっと寄り添い、多くの国民が他人事と思わずに北方領土を深く考え、解決に向けて動いていれば、そのつらさや悲しみを少しでも和らげることができるかもしれない。故郷へ帰る気持ちをあきらめてしまう人を減らすことができたかもしれない。そして、自分自身も元島民の方々と一緒になり、他人事でなく自分のこととしてこの問題を考えていきたいと心から思った。

実際には中学生の私に出来ることは限られていると思う。しかし日ごろの学校生活の中でも、人の気持ちに寄り添い、自分のこととして考えられる自分でありたい。この行動が直接北方領土問題の解決にはならないかもしれない。それでも私は続けていきたい。そうすることで少しずつ私の周りを変え、北方領土問題を自分事として考え、元島民の気持ちに寄り添う人々を増やしていきたい。それが自分にできる第一歩です。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土の重要性

京都市立開睛小中学校
九年　本田　月愛

私は毎朝新聞を読み、毎晩ニュースを見ます。その二つのメディアでよく報道されているのが領土問題です。よく耳にする言葉ですが、私は今までその内容を理解していなかったため、領土問題の重要性を分かっていませんでした。だから今回の作文を機会に領土問題の一つである北方領土について学校で習った内容を土台に考えようと思います。

北方領土は択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島から成り、自然が豊富で、珍しい動物がいるところです。また、潮目付近であるため魚が多くとれるし、北海道内陸部より温暖で雪も少ないです。そんな良い点ばかりの島で、日本政府は「日本固有の島だ。」と言っているのに、北方領土に行くことは禁止されているのです。確かに北方領土は江戸時代から多くの人が開拓した固有の領土とされているし、ロシアなどと結んだ条約でも北方領土について触れていないため、日本固有の領土ということが言えます。しかし、第二次世界大戦後ロシア（ソ連）が占領して日本人は追い出されました。そして現在の領土問題となりました。

私はその内容を学習すると北方領土問題についての大きなベースは理解したものの、重要性を理解するまでには至りませんでした。しかし、その後にもう一度北方領土問題について考えると何か自分なりの重要性を見つけ出すことができました。

もし、自分の住んでいる場所、家に他人が無断で入って来たり、占領されたりしたら嫌な気持ちになってその人をなんとかして早く追い出そうとするはずです。それと北方領土問題は話のスケールが違うだけで、同じことだと私は思います。自分の大切な場所、故郷が誰かによって奪われ、帰れなくなる状況がいま日本で起きています。自分の故郷をうばわれた人たちはいち早く取り戻して自分の故郷に住めるようにとずっと思っていることでしょう。そのような人たちのため、北方領土返還を強く願う人たちのために日本は北方領土問題に力を入れているのだと思います。また、日本にとってとても大切な場所で、たくさんの人の故郷だから返還に努力しているのだと思います。

京都から遠く離れている北方領土。今は行くことができませんが、その話を聞くことはいくらでもできます。もし、北方領土という言葉を耳にした時、目にとまったときは立ち止まって北方領土の重要性について考えてみてください。そうすればきっと、自分の中の北方領土に対する思いは変わることでしょう。

優秀賞（京都新聞賞）

後世につなぐ故郷への思い

舞鶴市立城北中学校
二年　村田　聖愛

「平和条約を結ぼう。」

ロシアのプーチン大統領は九月十二日、国際会議の場で、こう安倍首相に呼びかけた。平和条約を結ぶことは悪いことではない。しかし、僕は十分な交渉や両国の納得がないまま平和条約を結ぶことや四島の帰属を曖昧にしたまま、二島返還で決着することにならないことを願っている。なぜなら、北方領土は、まぎれもなく日本固有の領土であり、そこに住んでいた島民にとってかけがえのない場所であるからだ。

僕は、今夏、京都府の北方領土青少年等現地視察研修事業で、北海道に行き、歯舞群島・多楽島の元島民である河田さんのお話を聴くことができた。お話の中で、一番印象に残ったのが、島にある家族のお墓参りに、行きたくても自由に行けないということである。墓参の機会を得ても、国後島沖の船上での入域検査が通らず、歯舞群島の土を踏まないまま、根室に戻られたこともあったそうだ。河田さんの悔しさを思うと、僕は元島民の方々が元気なうちに、自由にお墓参りができるようになってほしいと思った。

細かな条件や交渉の内容が明かされないまま、「二島返還」という言葉を聞くと、残りの二島の島民の方々の落胆する気持ちが想像でき、やはり心からは賛成できない。どの島の元島民の方々も自由に故郷である島を訪問できるようになること、日本の領土、全ての国民の故郷を大切にする政府の姿勢こそが、大切なのだと思う。

では、まだ中学生である僕ができることは何なのだろうか。僕は、納沙布岬にある北方館に設置されていた「北方領土返還要求署名コーナー」で、署名をしてきた。それは、元島民の河田さんがおっしゃった、「北方領土は、元島民の島ではなく、日本の領土です。しかし、今、北方領土の返還要求運動は、元島民とその二世が中心になって行っています。高齢化した元島民がいなくなったら、この問題はどうなりますか。若い皆さんも自分たちの問題として、この問題をよく理解して、考えていってほしいと思います。」という言葉が心に残ったからだ。まずは、国民として関心を持ち、よく理解することが大切であり、小さなことでも行動を起こすことが大切だと思う。僕は、まだインフラが十分に整備されていない島もある北方領土への経済協力や北方領土に住むロシア人との「ビザなし交流」は重要だと思う。なぜなら、そのことによって築かれる信頼や友好こそが、北方領土問題解決のきっかけとなり、領土返還後の関係の基礎となるからだ。

僕は、今後も北方領土問題に関心を持ち続け、四年後、選挙権を得たときには、領土問題について、僕の考えに一番近い、候補者に投票していきたいと思う。

優秀賞（京都新聞賞）

私は旧島民の心に寄り添う

京都市立嵯峨中学校
二年　辰島　麗美

戦後七三年を経過した。その七三年前の夏に、人々は戦車と銃に追い立てられて、故郷の地を奪われたのだ。

その地は「北方四島」と呼ばれる所である。日本の最北端の島々で、先祖と共に開拓、育んできた愛する故郷である。極寒の冬季をじっと耐え忍び、荒れる海の漁に命懸けた人々。作物の出来は気候に強く支配され、種まきの後、手塩にかけ、いざ実りの時期に襲う寒波、それがもたらす冷害。この苦難を重ねながらも一年、そして、また一年と血の滲む働きによって必死に暮らしを立てて来た島民の人々だった。

先祖は、この地の墓に眠っている。厳寒の地で互いに手を取り合って暮らしてきた村や町の隣人達の連帯をあっと言う間に全て破壊し、奪い取った一九四五年八月九日のソ連軍侵攻の前に農民、漁民、商人、そして、学生、子供達はなすすべもなくただ銃に追われ、そして、貨客船に押し込められ、命からがら、全財産の一つとして携帯する事なく北海道に強制送還された。一夜にして全てを失った旧島民達は、北海道内においても安住の地を得られずにはいられなくなった。

その時から七〇余年を経て、幾度かのチャンスがあったが、全然、解決の兆しが見えて来ない。旧島民として帰島を待ち望んでいた人々も高齢化が進み、「なんとしても生きているうちに、平和的に帰郷したい」と言う願いは、ますます困難さを強めている。

日本国政府が、一九五六年十月、日ソ共同宣言をソ連と出し、平和的解決の糸口とされた時もあった。また、日ソあるいは日露の首脳会談の機会があるたびに議題として取り上げられ、旧島民のビザ無し渡航や漁業操業協定の締結を通して少しは日露間の友好関係改善も見られる。旧島民と、現在居住するロシア人島民の親善交流も実際に行われている。例えば、北方領土択捉島に住むロシア人少年が事故で瀕死の容態となり、日本政府が輸送機を送り、日本での治療により救命され、友好の象徴とされた。

領土問題は、国際紛争で最も敏感で困難だとされる。一方の国が有利であれば、他方の国の国民は納得しない。双方の国民が共に納得する事が出来ないままに時間が費やされ続けている。両国が真の友好関係を作り上げるために歩みより、譲歩を勇気をもって実行する世論づくりも大切だと思う。

私は何よりも旧島民の永年の苦労と努力、そして闘い続けている彼等の生活安定の実現を強く強く望みます。

日本とロシアが隣国であるが故に、歴史的に対峙して来た事は事実である。しかし、未来へ向けて平和的友好関係を築き上げる事が最も大切だと考えます。先祖伝来の地に再び立ち、父祖の精神を継ぐ事が実現するとどれ程嬉しい事であろうか。墓前に跪き、しっかりと帰島を報告する事がどれ程喜ばしい事であろうか。

その日が一日でも早く来るように、私は旧島民に寄り添う心を持ち続け、私が出来ることがあればどんな小さな事でもやっていきたいと思う。今回、友達と北方領土について話し合い理解を深めることができた。みんなで話す中で、私の思いと同じ人もいました。みんなで話すことによって、北方領土返還が一日でも早く帰ってくるといいねと思いました。

島民の心に寄り添い続けよう。

四島返還実現するまで！

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土返還に向けて

京丹波町立和知中学校
三年　梅原　侑理沙

今年、北方領土問題は大きな動きを見せた。北方四島のうちの二島、歯舞群島と色丹島が日本へ引き渡されるかもしれないのだ。しかし、このニュースを耳にした時、私は複雑な気持ちになった。素直には喜べなかったのだ。仮定とはいえ二島が日本へかえってくるかもしれない。だが、四島全てがかえってくるわけではないのだ、と。以前ならきっとこんな思いは抱かなかっただろう。意識が変わるきっかけとなったのは、今年の八月に北方領土の現地視察団として訪れた北海道でのことだった。

北方領土問題を身近な問題として捉え、正しい知識と認識を深めるという趣旨のもと行われた視察事業。この視察で初めて訪れた北海道の道東で多く目にしたのは「北方領土はわが国固有の領土」という言葉だった。配られる資料やパンフレットの多くに記されたその言葉は、見る度に私にこの問題について問いかけてくるように思えた。北海道以外で見かけることの少ないその言葉や、視察でまわった資料館、全てがこの領土問題が過去のことではなく何十年たった今でも色褪せることのない現実なのだと改めて感じた。一九四五年、ソ連軍によって島から追い出され、二度と故郷に住むことのできなくなった人たちの思いはどれほどつらく悔しいものだったのだろう。この視察で実際に自分の目や耳で北方領土問題に触れることで、この問題がただ解決されないまま、今に至ったわけではなく、たくさんの人の思いをのせて私達へと託され、受けつがれてきたものだったのだと知った。この気づきは、私の中で北方領土問題への意識がはっきりと変化するきっかけとなった。

また、この視察の中で元島民の方の話を聞く機会にも恵まれた。その話の中でもっとも印象的だったのは、

「墓参りがしたい」

この一言だった。私にとっては少し予想外に感じた。しかし、話を聞くうちに、これが今の現状なのだとも理解した。まだまだ解決に向けての課題は山積みなのだ。一九九〇年以降、ビザなし交流を含めたくさんの交流が実施されている。しかしそれは決して自らの意志で自由に行えるわけではない。この願いが実現されるためにも、一刻もはやい問題解決が望まれているのだ。

私達はもっとこの北方領土問題について知り、考えなければならないのだと思う。私は視察を通して、今までの自分がこの問題を知ったつもりになっていただけだったのだと知った。手もとにある情報だけがすべてではないのだと感じた。視察で触れた元島民の人の思いやたくさんの解決へと動く人達の願いは、知ろうとしなければこれからも知らないままだったと思うのだ。だからこそ、もっとたくさんの人が知ろうとして欲しい。一人一人の小さな関心、興味が大きな力になると私は信じている。いつか北方四島全てが日本に返還されることを願って、私は知り続けたいと思う。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

平和的な解決へ

京都市立北野中学校
二年　村瀬　歩実

ある日、私は新聞の大きな見出しに目がとまった。それを見たときは期待の気持ちが大きかった。しかし、内容を見て私は懸念を抱いた。その記事は「北方領土交渉が再始動」というものだった。

一一月一四日、停滞していた北方領土交渉が再び動き出した。安倍首相とプーチン大統領はシンガポールで会談した。プーチン大統領が今年九月に突如「前提条件なしの年内の平和条約締結」を提案して以来、初めての日露首脳会談だった。そして、この席で両首脳は、一九五六年の日ソ共同宣言を基礎として平和条約交渉を加速させることで一致し、北方領土返還をめぐる日露の交渉は新たな段階に入った。

この平和条約を今年度中に結び、日ソ共同宣言の内容が実現されたらどうなるのだろうか。簡潔に言うと、歯舞群島と色丹島が日本に引き渡されるのだ。ということは、もし実現されると択捉島と国後島は置去りなのか…。そもそも、択捉島と国後島は対象外というのがロシアの一貫した立場なのだ。つまり、日本は歯舞群島と色丹島の引き渡しを実現してから、択捉島、国後島の帰属を確認するつもりかも知れないが、ロシア側からすると歯舞群島、色丹島を返し、それで北方領土問題は解決としてしまうかもしれないということだ。これは大変難しい問題であると思う。しかし、日本はもうこの領土問題にお互いが納得するところで終止符を打たなければならない。なぜなら、元島民のほとんどが八〇歳以上と高齢になっているからだ。一刻も早く、一人でも多くの人が故郷の地を自由に歩き、暮らすことのできるようにする必要があるのだ。

私は両国が協力して行う共同経済活動というのが良いと思う。かつて、ソ連が北方領土を占領したとき、ロシアの人々と当時の島民との間で交流があったのだから。たとえ立場や考え方が違っていたとしても、同じように協力していけるのではないか。

ところで、つい最近再び動き出したこの問題。いったいどれくらいの日本人が知っているのだろうか。また、知っていたとしても、あまり興味がなかったりするのではないか。私は、昨年度もこの作文を書き、この領土問題について様々なことを学んだ。だからこそ、一一月の会談の内容も気になり調べてみたのだ。私は家族や知り合いに、知っているのかどうかを聞いてみた。しかし、ほとんどが「そうなんや」という感じで、他人事のようになっていた。この問題は、政府だけが一生懸命になって解決するものではないと思う。一人ひとりが、知り、考え、関心を高めていかなければならない。そのためには、知っている人が伝えていく必要がある。講演会を開くなど大きなことはできないかもしれない。だが、会話の中でちょっと北方領土の話を出してみるなど、相手に少しでも関心をもってもらう工夫はできる。それはちっぽけなことのように思うかもしれないが、その小さな一歩の積み重ねが北方領土問題解決の大きな一歩になるのではないか。

私はその小さな一歩を踏み出す一人になりたいと切に願う。

北方領土は紛れもない日本の領土である。だからといって今住んでいるロシアの人々から土地を奪い取っていいのだろうか。それは決してしていけない行為である。かつての日本が受けた悲劇を繰り返すだけだ。なんとか、平和的に一日でも、一秒でも早く解決することを願ってやまない。